

アイルランド伝承文学とエミリ・ブロンテ

堀出 稔

Irish Folklore and Emily Brontë

Minoru HORIDE

エミリ・ブロンテの青少年期 18 才~21 才の頃、妹アンと共に書き続けた一連のゴンドル物語の構成とその内容が、アイルランドに伝わる伝承文学の影響を受けていないかを確認することがこの研究の目的である。考察の順は、I、エミリの父パトリック・ブロンテがアイルランド出身であることからその足跡を分析し、伝記的事実からアイルランド伝承文学のゴンドル物語への影響を解明する。II、ゴンドル物語の創作と成立過程。III、ゴンドル物語がアイルランド伝承文学の一つ『デアドラ』及びジェイムズ・マクファーソンの『オシアン』との共通点・相違点を考慮し比較検討したい。

I

ブロンテ姉妹の父パトリックはアイルランド北部カウンティ・ダウンの農家に生まれ、貧しい家計を助けるため早くから仕事に就いていたが、苦学し特待免費生としてケンブリッジ大学に進学し、後にイギリス国教会牧師となった人である。ウィリアム・ライトは 1987 年ブロンテ家の祖先をアイルランドに辿った *Brontë In Ireland* を著している。

それによると、パトリックの父ヒュー・ブロンテはポイン川の北オードブリッジとナバンの近郊で幼年期を過ごした。しかし、一家が破産状態に陥りヒューは養子となりカウンティ・ダウンにおいて育てられた。ヒューは後に養父がブロンテ家を破産させてしまうことになったと養母メアリから聞き、養父の家を出て雇われ農夫として貧しい中で身を立てる努力しようとした、といわれる。彼は友人パディ・マックロイの妹アリスと結婚、10 人の子供が生まれ、その長男がパトリックである。ヒューは懸命に働き穀物を乾燥させるための小屋を母屋のそばに建てるまでになった。妻は羊毛を紡ぎ、家族の衣服を自ら作った。ヒューは農作業のかたわら村の人々を集めて昔話を語るようになって行った。民話・伝説の語り手の役割は、ブロンテ家の祖先から伝わったものであり、ヒューはそれを継承した。

The farmer's sons of the whole neighbourhood used to gather round Brontë at night to hear his narratives, and he continued to manufacture stories as long as he lived.

(1)

また、パトリックもほんの幼い頃から穀物置き場に寝かされ父の話に聞き入ったといわれる。ヒューの語る伝承物語の構成は荒削りで語気を強める間投詞が時々使用されたが、たいていは健康で道徳的な面を備えていた。極端な言葉や仕草によっておおげさに考えを伝えるということもなく、概して説得力のあるものであった。村の人々に語った物語は、迷信的なもの、暴君

とその残虐性、不忠と裏切り、復讐などであった。

Mr. Bronte loved to relate fearful stories of superstitious Ireland, or barbarous legends of the rough dwellers in the moors. . . . Emily, familiar with all the wild stories of Haworth for a century back, and nursed on grisly Irish horrors, tales of oppression and misery, — Emily with all this eerie lore at finger-ends, would have the less difficulty in combing and working the separate motives into a consistent whole. (2)

これらの民話や伝説がパトリックを通してブロンテ姉妹に語られたのは事実であるが、ヒューが具体的にどのような題名の話をしたかはウィリアム・ホワイトも書いてはいない。それ故に彼が5・6才でカウンティ・ダウンに来て育てられたという事実から推測すると、その土地ではアイルランドの北部の民話・伝説が主に語られたと考えられる。北部にはアルスター地方を中心にして伝えられている民話・伝説群がある。ク・フーリンを扱った「赤枝騎士団」という英雄豪傑伝説や、ケルト伝承の三大悲話の一つとされる『デアドラ』のウスリユーの子達の追放などの話がある。また、アルスター伝説群より数世紀後に形成されたフィン・マックールとその子オシアン、その孫オスカーの三代にわたるフィエナ騎士団の伝説も含まれる。このようなブロンテ姉妹の父パトリックの伝記的事実から判断して、エミリがアイルランドの民話・伝説のどの話から彼女の作品は影響を受けているとは断言できないが、全く受けていないとは言いきれない。なぜなら、ゴンドル物語は構成の仕方という点で『デアドラ』のなかに共通性を見い出せ、舞台設定や描写方法という点で『オシアン』の中にそれを見い出すことができる。その共通性の分析はⅢ、Ⅳの中で行うこととし、ゴンドル物語とはどのようなものであったかについて述べてみたい。

Ⅱ

ブロンテ姉妹の伝記を辿ると、彼女らの故郷ヨークシャー州ハワースでの生活は決して恵まれたものではなかった。イギリス国教会司祭としてその地に赴任したパトリックは、妻マライアとの間に5人の女の子と1人の男の子があった。末の娘アンを生み、マライアは病のため早世した。また、エミリが7才の時姉マライアとエリザベスが司祭の女子を養成する私塾の環境不良のため、食中毒で亡くなっている。亡き母の姉ブランウェルがブロンテ家の世話に住み込むが、子供達はあまりなじまず自分達だけで遊んだ。その遊びとは4人の子供達が一緒に空想物語を手作りの小さなノートに書き、見せ合い楽しむことであった。子供達のこの創作遊びの発展過程は3つの時期に分類できる。クリスティン・アレグザンダーによれば、第1期(1826～31年)では『青年たち』、『われらの仲間』、『島人たち』などの劇であり、第2期(1832～35年)ではグラスタウン物語、第3期(1836～39年)では創作グループが2つに別れ、ブランウェルとシャーロットがアングリヤ物語、エミリとアンがゴンドル物語を創作した。しかし、元々ゴンドル物語はまとまった原稿としてエミリとアンの死後存在していたわけではなく、E.F.ラチフォードが『エミリ・ジェイン・ブロンテ全詩集』の193編の詩のうち約40編、そしてアンの詩の一部から1955年一つの叙事詩として再構成し *Gondal's Queen* という題名を付けたのが始まりである。後にこの再構成された *Gondal's Queen* をゴンドル物語と呼んでいる。ゴンドル物語の概要は次のようである。舞台となる場所は太平洋である。北太平洋にゴンドル島があり、南太平洋にガールダイン島がある。ゴンドル島にあるゴンドル連邦王国は4つの王国ゴンドル、アルコナ、アンゴラ、エクシナで構成され、首都はレジーナである。ガールダイン島はゴンドル連邦王国の属領であり、アレクサンドリア、アルメドーレ、ウラ、エルセ

ラディン、ゼローナ、ゼドーラという地域に分れている。主な登場人物はオーガスタ・ジュラルディン・アルミーダ (A.G.A.) またはロジーナがアルコナの王女であり女主人公である。A.G.A.を補佐するエルドレッド卿、A.G.A.の恋の相手となる男性達、ジュリアス・ブレンザイダ、エルベ卿アレクサンダー、アスピン城領主アルフレッド、アメデウス、フェルナンド・ド・サマラなどである。また、アルフレッド卿の娘アンジェリカとその恋人はダグラスである。この物語のあらすじは美貌の持ち主である女主人公 A.G.A.の悲劇が中心となる。A.G.A.は恋多き野心に満ちた王女として成長し、彼女の周りに集まる男性達はその美貌と力に屈服し悲劇的な最期を遂げる。最初アンゴラの王子ジュリアスとガールダインにある南部大学で恋に陥る。将来を囑望されていたジュリアスは勉学を放棄し投獄される。その間に A.G.A.はエルベ卿アレクサンダーと墮落ちするが、獄を出たジュリアスはアレクサンダーに戦いを挑み彼を滅ぼす。奔放な A.G.A.は北部大学に移され投獄され、その後自由になるとアスピン城領主アルフレッドと愛し合う。アルフレッド卿にはアンジェリカという娘と彼女を慕う里子のアマデウスという名の少年がおり、娘は A.G.A.を憎むがアマデウスもまた A.G.A.の美貌の虜となって行く。やがて再びジュリアスが A.G.A.のもとに現れアルフレッド卿を追放、2人でゴンドル連邦王国征服の野心に燃える。ゴンドルの最も大きい王家エクシナ家を打倒しジュリアスが王位に就くがそれも東の間、アマデウスによって彼は暗殺される。A.G.A.はいったんガールダインの山岳地帯に逃亡するが、雪の降りしきる中ジュリアスとの間にできた子供を置き去りにし再びゴンドルの王位奪回を願って山を降りる。A.G.A.に運命が開け王位をついに獲得するが、ある日宮廷生活に疲れ果て武器も持たず荒野を散歩中、アンジェリカの遣わしたダグラスに暗殺され奔放な彼女の生涯を閉じる。以上がラチフォードの再構成したゴンドル物語のあらすじであるが、女主人公 A.G.A.の激しい情念、周囲の者を悲劇の淵に沈めながら自らも悲惨な最期を遂げる姿は何にたとえられるであろうか。たとえたとすればアイルランドケルト伝承の3大悲話の1つ『デアドラ』ではないだろうか。

III

ゴンドル物語と『デアドラ』との共通性は1つに予言者の存在である。ゴンドル物語においてはアルコナの王女 A.G.A.を補佐するエルドレッド卿が物語の始まりの彼女の洗礼の日にその日の天候によって彼女の一生を予言する。

Lady, watch Apollo's journey:
 Thus thy firstborn's course shall be —
 If his beams through summer vapours
 Warm the earth all placidly,
 Her days shall pass like a pleasant dream in sweet tranquility.
 If it darken, if a shadow
 Quench his rays and summon rain,

 Her days shall pass like a mournful story in care and tears and pain.
 If the wind be fresh and free,

 Her days shall pass in Glory's light the world's drear desert through. (3)

エルドレッド卿は太陽の神アポロの運行によって王女の人生航路を占う。その日の太陽の光が

大地を暖めるなら彼女の一生はおだやかなものとなり、もし闇があたりを覆い太陽の光をさえぎり雨が降るなら苦痛と涙の生涯を送ることになる。もし風が吹けば苦悩に満ちた人生も栄光の光に照らされて送ることができるという。しかし、その日の正午を過ぎると空模様は急に変化し嵐の様相を呈し増々激しくなった。A.G.A.の生涯はその嵐のように激しく、運命の糸に操られ悲劇的なものとなってゆく。さて、『デアドラ』ではウラーの王コノールがマクネッサ配下の赤枝騎士団の酒宴の席で筆頭語り部フェミリの妻に女兒の誕生が知らされ、ドルイド僧カファが予言する。

「この子はデアドラと呼ばれましょう。まさしくこの子にふさわしい名前——なぜなら、この子のためにウラー全土におびたしい災いがふりかかるのです。嫉妬あり、争いあり、戦争が起こりましょう。数々の裏切り行為が生じます。多くの武者たちが命を落し、追放される者も数知りませぬ。」(4)

ゴンドル物語と『デアドラ』共に予言が女主人を悲劇の中に導き、悲惨な最期を遂げることになる。ゴンドルの予言者エルドレッド卿はまた多くの予言をしている。A.G.A.の3番目の恋人アマデウスがアンジェリカから気持ちが離れ、A.G.A.に恋しその果てに追放されてしまう運命やジュリアスとA.G.A.のゴンドル征服の野心とその戦いの悲惨さを星のめぐりによって予言し、反対した。また、A.G.A.がジュリアスとの間にできた子供を冬の山に置き去りにすることも予言する。しかし、『デアドラ』では予言者カファの登場は最初だけであり、話の進行の中で女主人公自身が予言することになる。デアドラ自身の予言は周囲の者に警告を発するかたちで行われるが、物語の進展そのものが運命の糸に操られるように進んで行く。

また、悲劇における残酷性にも相違が見られる。ゴンドル物語においては女主人公の過剰なまでに自我を押し通そうとするあまりにも激しい気質のために周囲を悲劇に巻き込んで行き、結果的には周囲の者の恨みによって女主人公は復讐を受けることになる。いわば自ら振るった刃によって自らが死に至るのである。

You know too well — and so do I —
Your haughty beauty's sovereignty;
Yet have I read those falcon eyes —
Have dived into their mysteries
Having studied long their glance and feel
It is not love those eyes reveal. (5)

ジュリアスがA.G.A.との恋に溺れ牢獄に捕らわれた時、その壁に彼の心境を書き残した言葉である。A.G.A.の愛には男性を屈服させる傲慢さが見え、彼はその背後に彼女の野心を読み取っているがA.G.A.の魅力に逆らうことができず、ゴンドル連合王国を征服したいという彼女の野心に協力し暗殺されてしまう。アスピン城主アルフレッドもアマデウス同様ジュリアスが再び彼女の前に姿を現すと、追放され異国で死に亡霊となって城を訪れる。

The ancient men, in secret, say
'Tis the first chief of Aspin grey
That haunts his feudal home;
But why, around that alien grave
Three thousand miles beyond the wave, (6)

A.G.A.の仕打ちに対するアルフレッド卿の無念の想いが亡霊となったのであるが、その想いは

後に彼の娘アンジェリカによる A.G.A. への復讐となる。また、ジュリアスの子供を遺棄してまでもゴンドル連合王国を奪回した彼女は心の空白を埋めるため、ギターの名手フェルナンド・ド・サマラと恋に陥るが興味を失うと彼を牢獄に追いやり獄死させてしまう。このような A.G.A. の残酷さに比べ、『デアドラ』では女主人公デアドラの生き方には残酷な面は少ない。むしろ、デアドラはウシュナの3兄弟と部下達を助けようと危険な時には常に予言をニーシャに伝えている。この点はゴンドル物語の悲劇性と大きな相違がある。デアドラがウシュナの者達の危機を回避できる予言をするが、ニーシャは彼女の予言とは正反対の行動をとってしまう。

「おお、ニーシャ、あのエメンの上空を覆う血のように赤い雲はいつたい何の前触れでしょうか。きっと悪いことが起こります。お願いですから、しばらくダンダルガンのク・フーリンのもとに身を寄せて、ファーガスがバラフの宴から帰って来るのを待ちましょう。コノール王にはきっと何か悪だくみがございます。」

「いや、そうするわけにはいかない、愛しいデアドラよ。それは敵にうしろを見せること。私たちには、恐れるものは何もない。」(7)

デアドラはウシュナ兄弟の危機回避を何度も訴えるが、その度にニーシャはそれを否定し、自らを悲劇に追いやって行く。ゴンドル物語の女主人公 A.G.A. は激しい気質を備え野心を抱きつつ人生を歩むが、デアドラにはそれはなく彼女にはどうにもならない力によって悲劇に陥って行く。むしろ悲劇を回避しようとするのが不可能なのである。この相違は、両作品とも共通の悲劇的予言から出発しながら、ゴンドル物語では人間的葛藤の原因・結果がはっきり描かれて終幕をむかえるところにある。一方、『デアドラ』は最初の予言はまるで1つの定めのように人間的葛藤を越えた様相を示しながら物語は終わる。これは口承文学のため、時代が経るに従い枝葉末節が脱落し、物語の根幹となる部分のみが残ったためではなかろうか。

IV

ジェイムズ・マクファーソンの『オシアン』のケルト伝承を参考にしてゴンドル物語の舞台設定と作品の描写について考えてみる。ジェイムズ・マクファーソンの『オシアン』については19世紀初頭の創作以来ほんとうのケルト伝承であるのかどうかという議論があり、いまだに解明されない状態であるが、簡単にケルト伝承とは全く関わりないマクファーソンの架空の物語であるとしてエミリ・ブロンテへの影響を否定するのも問題である。なぜならマクファーソン自身もスコットランドのアイルランド系の住民であり、たとえ『オシアン』に書かれた伝承のあらすじが架空のものであったにしろ、舞台設定や作品描写の面から考えればケルト的な雰囲気を与えていることは確かではなかろうか。当時マクファーソンの『オシアン』はイギリスロマン主義のさきがけとなる重要な作品であり、またたく間に世間の注目を集めた。

Sir,

I write this to acquaint you of a circumstance which has happened to me and which is of great importance to the world at large. On May 22, 1829 the Chief Genius Tally (Emily) came to me with a small yellow book in her hand. She gave it to me saying that it was the Poems of that Ossian of whom so much has been said,... (8)

この手紙文はいわゆるブロンテ家の子供達の空想遊びで、ブランウェルが書いたものである。エミリが兄ブランウェルに当時世評を騒がしている黄色い装丁で作られたオシアンの詩集を手渡した様子が述べられている。E.F. ラチフォードも *Gondal's Queen* の序文で『オシアン』の舞

台設定や描写がゴンドル物語のそれと類似した部分のあることを指摘している。例えば、ゴンドル物語の設定された舞台は太平洋上の南北の2つの島である。にもかかわらず、その舞台は北部イングランドの風景が描かれている。

Lord of Elbe, how pleasant to me
The sound of thy blithesome step would be
Rustling the heath that, only now
Waves as the night-gusts over it blow (9)

ジュリアスに滅ぼされたエルベの領主アレクサンダーを偲んで A.G.A. が悲しむのであるが、生前エルベ公がヒースの荒野を歩く折の葉のすれる音が今はなく、そこには風が吹き渡るだけの様子が描かれる。そこには古城があり荒野が続き、所々に湖が点在している。この描写は全く太平洋の島々の自然環境を描いたものではなく、マクファーソンの描く『オシアン』の舞台に意識的にか無意識にか判断できないがエミリの心は傾いている。『オシアン』にはヒースの風になびく姿が多く描かれる。

いつの日にかヒースの茂る野の娘の声が聞かれよう。娘達が丘の上に
その姿を求めても美しい黒髪を目にすることはなかろう。(10)

オークニイ諸島のイニス・トルク島のサルノ王をローマ軍が攻撃した時、フィンガル王が助けに向かう。王女クーボラとフィンガル王は恋に陥り、戦場のフィンガル王が戦死したという偽りの知らせに衝撃を受けクーボラが死んでしまう。後に残された娘達が彼女を悼む場面である。『オシアン』の舞台はケルト民族が活躍したアイルランド、北部イングランド、スコットランド地方とその周辺の島々である。ヒースの茂る荒野、森、湖、川、海が常に登場する舞台である。

また、『オシアン』には乙女が立琴を奏でながら先祖の戦勝を讃え戦士達を鼓舞する場面が多く描かれる。

奔流のローラの堤の薊をゆるがせてせまい谷間をふいてゆく目にもと
まらないそよ風はなぜふいに音がしなくなったのか
白浪のたつ山川の音も樹陰の岩の立琴の名手マルビーナよ
そばにきて、歌心をよびかえしてくれ 白い手の娘よ、
歌心をよびかえしてくれ (11)

ゴンドル物語では乙女が立琴を奏でる場面は見あたらない。楽器を奏でるのはフェルナンド・ド・サマラがゴンドル連合王国の女王の地位に就いた A.G.A. の疲れを癒すために奏でるギターである。しかし、ヒースの茂る荒野に吹く風の音はまさに『オシアン』の立琴そのものと言ってもよい。

The woods-even now their small leaves hide
The blackbird and the stockdove well;
And high in heaven, so blue and wide,
And thousand strains of music swell. (12)

青く澄み渡った空と地平まで続く荒野に吹く風は、エミリー・ブロンテにとって何千という音の調べが奏でられたかのように聞こえたのだろう。ゴンドル物語に構成された彼女の詩には多くの点でアイルランドの伝承物語との共通性が見いだされるように思われる。

結 び

これまで、E.F. ラチフォードが主にエミリ・ブロンテの詩から構成したゴンドル物語に対するアイルランドの伝承文学の影響について考察してきた。ブロンテ家はアイルランドで代々民間伝承の語り手の役割を果たしていたという事実及びエミリがケルト民族の英雄伝説を描いた『オシアン』を知っていたことを根拠にして、ゴンドル物語を分析した。ゴンドル物語のあらすじはアイルランド伝承文学の中に見いだされないが、物語の構成、例えば予言から物語が始まる手法、舞台となる場所、詩に表された自然描写にはきわめて共通性がある。相違点としてゴンドル物語の女主人公オーガスタ・ジェラルディン・アルメダ (A.G.A.) の自我の強さである。エミリはゴンドルの世界を作り上げる時、意識的にあるいは無意識のうちに2つの要素すなわちアイルランドの伝承文学の影響と近代人としての自我の問題を捉えていたのかも知れない。

註

- (1) William Wright, *Brontes in Ireland*, (New York: Haskell House, 1971), p.131.
- (2) *Ibid.*, p 137.
- (3) Fannie E.Rachiford ed., *Gondal's Queen*, (New York: McGraw-Hill, 1954), p 48.
- (4) 三宅 忠明『アイルランドの民話と伝説』(東京:大修館書店、1978)、p.159.
- (5) *Op.cit.*, *Gondal's Queen*, p.54.
- (6) *Ibid.*, p.90
- (7) 『アイルランドの民話と伝説』、p.173.
- (8) Brian Wilks, *The Brontë*, (London: Hamlyn, 1975)、p.50.
- (9) *Op. cit.*, *Gondal's Queen*, p 66.
- (10) 中村 徳三郎訳『オシアン』(東京:岩波書店、1977)、p 50.
- (11) *Ibid.*,p.10
- (12) *Op cit* , *Gondal's Queen*, p.78.